

## 私の保育



太田 知恵子

「おやつを用意ができました」 エプロンをかけた子どもたちが報告に来て、「どうぞ」と言う。パズルに夢中になっていた三歳児

が立ち上がって「私おやつたべてくるから そおとしておいて」と、となりの子にたのんでいる。朝、九時四十分、子どもたちは友だちと連れだっておやつの部屋に集まってくる。一人でミルクをついでクッキーをつまむ。テーブルの上にはメニューがのっている。

「今日のクッキーはニコずつです」

自分たちでバターとお砂糖をこねてたまごをいれメリケン粉をふるって作ったクッキーである。子どもたちはたまごを上手にとく。たまごをうつわにわりいれることも上手である。二、三回は床にたまごをおとした。みんなはそれを見て、たまごはボールの上でわらなければ外におちることがわかったようである。

私は子どもたちが上手にたまごをわることができる信頼して

いる。ふしぎなことにそう信じている教師のいるところではあまり失敗をしないようである。

おやつのクッキー作りで、教師の役割は、天火の中からやき上がったクッキーを出すことである。時計を見ていて、もうやけたようだと教えてくれるのは子どもたちである。

朝の楽しい自由あそびのひとこまである。

ある子どもたちは、庭でおやつにすることもある。外であそんでいる友だちのためにワゴンを押して、おやつをはこぶ。友だちによせる好意の表現である。

砂場であそんでいた子らは手を洗ってワゴンのまわりによってくる。

「ありがとう」と彼らは言う。

「もって来てくれたの？ よかったなあ」と友と顔を見合わす。そんなとき本当に人の好意がわかるような顔付きをしている子

らである。可愛いと思う。ワゴンを押しかえつてくる子は満足  
そんな面もちである。

この姿も愛しい。生活をする、ということはこのようなことでは  
ないか。その中で彼らは他のために生きることを学ぶ。そして  
交わりの温かさを知る。

幼児期に覚えるからといって字を教えることが教育なのか、計  
算をさせることが教育なのか、将来の生活に備えてという名目に  
終始し、今の「時」の大切さを忘れていてのではないかと考え  
つづけている。

私の愛する園児たちが喜々として本もののお菓子になるメリケ  
ン粉をこねて、小さな掌でまるめている間に、他の園児たちはエ  
ンピツをにぎって字の練習をしている。二人、三人とつれだつて  
なわとびを楽しみ、ジャンブルジムでおにごっこに興じている間  
に、よその園児たちはマイクをとおして命令される教師の声や、  
よびこぶえに従って整列して行進をしている。どうしてこんなに  
もちがつてしまうのか。一体教育とは何なのか。人を人とする営  
みは本当はどこにあるのか。私たちの幼児に対する認識は、願  
いは一体どこに基盤をすえているのか。日本中の保育者が一堂に集  
まって一緒に考えてみたいと思う。そして一緒に新しく出発しな  
おしたらとそんなことを時折ふと思う。

重ねて言うが、メリケン粉をこねるといふ一つの行為が生活だ  
と言っているのではない。その中で友だちと交わり、自分たちの  
役割を認識し、一つの目的をもって他のために生きることの喜び  
を経験しているのである。ただクッキーが上手にできるような  
ための練習をしているのではない。生活の喜びをいろいろの角  
度から学んでいるのである。しかも一人一人がその一人にとって  
この上なく大切な経験を重ねているのである。心ある教師ならそ  
れが見えるはずである。

あるところでこんな話をきいた。

「一クラス二十五名でしてみたけれど、子どもが少ないと先生  
が手をかけすぎて過保護になつて訓練ができませんね。ためして  
みて三十五名が丁度いいですよ」「やはり団体生活ですからね、  
少ないと意味がありませんよ、四十名でいいんじゃないです  
か」

幼児期がどのような時なのか、もう一度学んでほしいと思つ  
た。あたり前のことがあたり前に理解されているということがど  
んなに大切なことか、思わされたのである。

マイクで動かされている子どもの姿が見えてくるようである。

私の園は五十名の小さな幼稚園であるが、五名の教師たちは誰も子どもに手をかけない。遊びの中で経験を重ねていくのは子ども自身である。それを見守るのは教師である。子らがえらんで経験していく事柄は、教師のねがいの中に設定された保育環境の中から得ていくものである。えらぶのは子ども自身である。教師は期待して、子どもは自主的にすすんで、である。

おやつ時間は九時四十分―十時十分まで。この時間内に子らはおやつをすまさないといけない。時間がすぎると小さな責任者はテーブルクロスをたたみ、部屋をはく。知らせたのに来なかった子どもは、おやつはたべられない約束がある、遊びの中からその時間を生み出し得なかった子どもはどんな理由があってもおやつはもうない。

ある日いつものようにお掃除にとりかかろうとしていた時、一人の子が部屋に急いではいって来た。

「ほくまだおやつたべてないの」

ほうきをもったまま小さな責任者はこう言った。「もう時間はすぎちゃったのよ、どうしてはやく来なかったの？ 今日だけはかんべんして上げるけど、今度は気をつけてよ」

彼女は片づけたミルクさしからコップにミルクを注いで彼の手

に渡し、しまってしまったクッキーを彼のために出した。

「ありがとう」男の子はほっとしたようにクッキーをつまんだ。それから二人は顔を見合わせてニッと笑った。

二人の会話と行為は何とも私の心をなごませたのである。約束どおりならおやつはもうもらえなかったはずである。この男の子はたしかに今度はおくれないと思ったようである。

もらえなくて今度はおくれないぞ、と思うより、時間を守らなかった自分に対してやさしくたしなめてくれた友を思って、もうおくれなと思う方がはるかにいいと私は思う。

この子らにとってその日は幸せな日であった。

× × × × × × ×

子らとの生活は本当に楽しい。

きびしいけれど冷ややかでない。どんなことがあったか一つ一つは覚えていないけれど、幼い日々は守られて、幸せであったと印象に残るような保育をしたいと思う。これは教師のセンチメンタルではない。今、成長しつづけている愛する子らのためである。

ある母親はこう言った。

「一年生になっても、この子は幼稚園でつくったクッキーを宝石のように大切に思っているのですよ」と。

毎日毎日子らの心に宝石をふやしたいと思う。(関東学院短大)